
ぼくらの島 ~ a fabulous island ~

葉月 あや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくらの島 ～ a fabulous island ～

【Nコード】

N2799A

【作者名】

葉月 あや

【あらすじ】

邪道・ファンタジー・開幕!!!!!!

chapter 1 人生最大級の事件

神官殿が見ちゃったんだってさ、白と黒の化け物を。

空はやたらと澄んでいた。

冷たい風は意地悪くびゅうびゅう吹くし、息を吐けば、ばかみたい
に白い息が出る。

朝日は弱々しくて、影もおぼろだ。

この島、フューネアル島は四季がはっきりしていて、秋の次には
ゲンキな感じで冬が来る。

フューネアル島の民はむかしから伝統を大切にし、島を愛してきた。
とか何とかこの島のことを紹介されてるのを、どっかの図鑑

で見たことがある。

けどさ、今時そうやって島の民って一括りにしないでほしいよ。だってぼくは伝統なんかどうだっていいし、こんな何の変哲もない島になんか、執着はないんだから。

ぼくはもうじきこの島を出る。

それはまだ決まっていんだけど、学校の先生たちが確実だっていつてるんだから、ほとんど決定事項なんだ。

本州に5つある国立上級学校（略して国学）へ行く生徒には、国からの援助金が出る。援助が出るって事はそれなりに難しい試験も受けなくちゃならない。でも都合がいいことに、ぼくは勉強が得意だった。

ぼくみたいな受験生たちは、島の援助で1年前から特別学級（略して特級）っていう施設に通う。施設についていても島役所のなかの部屋を使ってるだけなんだけどね。

この国は多数の島から成り、当然本州に首都がある。その国学に生徒が送られるのはかなり名誉なことだから、特別学級には島一番の教師達がつく。この教師に選ばれることも、島では相当に名誉なことなんだ。もちろん受験生になることも。

島役所への道は、すなわち国学へつづく道。家から遠いのはうんざりするけれど、あと何ヶ月かの辛抱だ。

「おはようティオン。今日も寒いな」

いきなり呼びかけられて、ぼくはびくつと肩を揺らす。ぼくは動揺したのを隠しながら、つとめて朗らかに笑みを作ってから振り向く。相手は声でわかる。

「おはよう、ライ」

ライはぼくと同じ、国学の受験生だ。

「いつもこの場所で会っな」

ライはにっこりと、知性溢れる笑顔で言った。ぼくらは毎朝のように、島役所の前の噴水の広場で挨拶をする。お互いの家は反對方

向にあるから、ここではじめて会うのだ。

「家が遠いからって余裕もって出発して、必要以上に早く着いちゃうんだよな」

ぼくは困った笑顔にして言った。

ライとはプライベートではあまり関わらないけれど、ぼくらはそれなりに話が合ったし、彼みたいな優等生と話すのは嫌いじゃなかった。ライはみんなの憧れだ。

まず成績は一番だし、スポーツ万能で、顔もいいし、品行方正で、島警察の幹部の息子だから裕福だし。とにかく例を挙げるのにも時間を食うくらいの商品なんだ。ほんとに同じ14歳だよ。

「俺もそうなんだ。はは、実は似たもの同士なのかもな」

ライの声は上から降ってくるから、ぼくは見上げないように注意して一緒に笑った。

彼は雲の上の人だから、ぼくも素直に憧れているけれど、ライの背が平均よりかなり高いってことには閉口した。こればかりは不公平ってものだ。ちょっとくらい分けてほしいよ。

ぼくらはそのまま他愛もない話をしながら歩いた。けれど島役所の前に来たとき、その話題は回ってきた。

「ティオン、もしかしてもう知ってるかもしれないけど」

ライは前置きして言った。ぼくは先を促す。

「フューネ小神殿が、何者かに壊されたらしい」

その瞬間、ぼくは目を見張って固まった。町の騒音が、一気に遠くなった気がした。

特に思うところも無いこの島の中で、神殿には唯一、大切なものがあつたんだ。

もう授業どころではなかった。一刻も早く現場に行きたかった。そついうわけで今日のぼくは、典型的な劣等性になってしまった。

上の空で先生に注意されて、みんなに笑われるっていう貴重な経験もした。

終了の鐘とともに、ぼくは教室を飛び出した。島役所の中をバタバタと駆け、かばんは走りながら閉める。

特級は、平日午後七時まで開講している。外はもうどっぷり夜だった。

今日は大通りが込んでいたので、人ごみをすりぬけて、電灯の光も届かないような狭い通路を通って急ぐ。

出発しかけたバスに滑り込んで、停留所で扉が開いたら、サラブレットの出走みたいに走り出した。

石畳の道を駆け抜けて、ぼくは町のはずれの小山に向かってもう一度走り出す。

「着いた」

ぼくは膝に手を置いて、ぜいぜい息をした。あれから長い階段を上がった、小山の頂上に登ったんだ。真冬なのに汗をかいた。コートはとつくに途中で脱いで、腕に引っ掛けていた。

呼吸を整えて、暗い低木の群れを過ぎて、件の神殿に歩を進める。目を疑うって言うのはこういうことだったんだ。

多くのライトに照らされた光景は、まさに瓦礫の山だった。白い岩を積み上げて造った小さな神殿は、あちこち欠けて、天井も滑り落ちていた。島の反対の大神殿と対になる神殿は、その面影を残してはいない。警察と役人と、何人かの見物人がいた。

ぼくは息を吞んで、神殿の裏手に回った。

漆黒の闇を、持ってきた懐中電灯で照らしだす。

「うそだ……」

ぼくは愕然とした。そこにあるはずの石像の姿はなかった。石台だったものもバラバラになり、あたりには神殿と同じ白い石片が散乱している。

でも石像が壊れたにしては、石片の量が少ないのに気がついてしま

った。とたんにある考えにいきつく。

「フューイの像は盗まれたんだ…」

ぼくはその像が大好きで、よく会いに来ていた。美術の課題ではモデルにしたし、何かいやなことがあると、真っ先に此処へ来た。そのフューイの像を見ていると、心が静まって、またがんばろうって気になるから…。

「なんで…」

ぼくは神殿のほうに走り出した。そしてしゃがみこんで何か調べている役人らしき人に声をかける。

「なにか、わかった事がありますか!？」

役人らしき人はこちらを向き、『いや』と短く答えてまた作業に戻ってしまった。

ぼくはもうどうしようもなくて、もういちどフューイの像のあった場所に戻った。

フューイの像は神殿と一緒に建てられた古い女神像で、とっても綺麗だったんだ。

本州にいったあとでも、帰省の折には絶対に訪れようと思っていた。それくらい魅せられていたんだ。ほんとに不思議なくらいにさ。

でも、壊されたって決まったわけじゃないのが、唯一の救いだっ

た。

「還ってくるといいな…」

そう願って、ぼくはそのまま帰るしかなかった。

「ティオン、ティオンってば」

後ろの席のシェナンが鉛筆でつつく。ぼくはバツと立ち上がった。教室中でくすくすと笑い声がもれる。定期試験のテスト返しで、ぼくの番がまわってきたらしいんだけど、ぼくは上の空だった。

「どうしたの、昨日から様子が変よ？」

親切なシエナンに曖昧に笑いかけて、ぼくは教卓に向かった。

フューイ像のことばかり考えてたなんて、とても言えないよ。いまだき信心深い子供も多くはないし、身の回りに直接関わらないことに心を傾けすぎるのは、変人の特徴つてのがぼくらの常識。それから外れたら、気味悪がられてしまうだろうし。

「ティオン・ガーテスト、よく頑張りましたね」

数学のハクトン先生が、解答用紙を渡しながらほめてくれた。見れば、前回よりずっといい点だった。ぼくは急に誇らしくなって、でもできるだけ平静を装って席に着いた。

そんなことをぼくは、次の時間もその次の時間も繰り返さなきゃならなかった。要するに、今回の試験は大健闘だったんだ。おかげで鬱々とした気分はいぶマシになっていった。

「ティオン、放課後暇か？」

隣のクラスのライが声をかけてきた。特級は2クラスある。

「オレは別に暇だけど…」

ぼくは一人称を、きちんと「オレ」に直してして答えた。「ぼく」はガキっぽいって、昔からかわれたことがあるからだ。

放課後ぼくらが遊ぶなんて初めてだった。ただでさえ特級のメンバーはライバル同士。みんなさすがに表には出さないけれど、お互いに壁を作りがちだ。それは競争心をあおる教育をされているからか、人間関係にも多少は影をおとしているらしい。

そんな中ぼくらは国学行きが確定とされているし、誰とかがみ合う必要もない。けれど放課後にこうやってつるんだ事もなかったから、なんだか変な感じがした。でもうれしかった。島役場に通り始めてから3カ月が経つ。まともな友達をつくるなんて半ばあきらめていたところだったから、よけいに気持ちが悪くなった。

そうだ、成績上位者ならすこし余裕があるだろうし、ちゃんと踏み込んだ会話でもしてみようかな。受験が終わったら、同じ学校の生徒になるかもしれないだし、わりとすんなり親しくなれるやつも、

結構いるかもしれない。

「なあ、ティオンの家に行ってもいいか？」

ライはいつもの笑顔で言った。

「ああ、別にいいけど遠いよ？」

「別に構わないよ。まだ早いし」

今日はクインの日で、授業はいつもより早く終わって2時までだった。一週間はソイルから始まってコイル、ツァール、ネルル、ノエル、クイン、ニフルの順でめぐる。

島学校のやつらはクインの日も休みで、一般的休日のニフルとあわせて2連休になるんだ。ぼくらは1・5連休ってかんじかな。しかもあと半年くらいで、休日返上っていう恐ろしいハードルが待っている。ただでさえ朝7時から半日、完全拘束されてるのに、ほんと嫌になっちゃうよ。

「ティオン家^ちってパン屋だったんだな」

ぼくの家の前で、ライがつぶやいた。看板は『ガーテストイ・ベーカー』とか芸のない店名を世間に知らせている。

島役所からここまではバスと徒歩、合わせて1時間半かかる。ぼくの家の地域は階段の多い造りで、狭い路地も迷路みたいに入り組んでいるからバスも通っていない。ライの家は、役所を挟んでぼくの家の反対側で、通学時間は約40分。帰るのが大変じゃないのかな、と今更ながら、時計を見つつ思った。

「あらおかえりー！」

母さんが、ばかでかい声でカウンターから言った。そんな声を出す必要があるほど離れてなんかないのに、恥ずかしいな。

夕時まで、まだ時間があるからか店は暇だった。父さんはたぶん奥でパンを焼いている。

「お友達連れてきたの？」

「特級のやつ」

すると母さんは、あら、を何回もくり返した。ぼくはそっぽをむいた。

「素敵なお友達ねえ！ティオンったら学校変わってから友達のことぜんぜん話さないから、友達が出来てないんじゃないかって心配してたのよ。ほらこの子、変にこまっしゃくれてるからさ、むかしっから難しくてねえ。ほんと仲良くしてやってね」

ぼくは母さんをにらんだ。母さんは必要以上に話すから、裏口からこっそり入ってたんだけど、そうすると後でオニババになる。昨日は帰りが遅くなって怒り狂ったあとだから、余計にひどいことになるだろう。普段でも、母さんのいない方から入ると小言クソババになる。我が家の方針に従って怒鳴ってさ。

「ええ、もちろん」

ライはきれいな笑みをして会釈した。

もうそれだけで充分だった。母さんはライにノックアウト、いちこるって感じだった。目がすでにハートマークになっている。ぼくは顔をひきつらせた。するとライの奴は、満足げにニコツと笑って見せたんだ。

2階の部屋にあがって、ぼくは乱暴な仕草でベットにかばんとコートを放った。

「今回の試験良かったんだって？」

ライがベットに方向転換した椅子に座りながら言った。彼の皮製の上等なバックは、ぼくの机にきちんと置かれる。コートはその横に、礼儀正しくたたまれている。

「なんで？」

ぼくはちよつとぶつきらぼうに言った。一階の最悪な空気が抜け切っていないかったからさ。

「そういう噂はすぐにまわってくるよ。俺らにとっては一番の関心事だろ」

「そっか」

まあ、納得だな。

「お前、俺のいつこ下だつて」

「はあ!？」

聞いて、ぼくは目をまるくした。順位が出るのは答案が出てからもうちょっと後のはずだ。本人も知らないような情報なんか、誰がいつ集めて発信しているんだろう。なんていうか、水面下の競り合いの激しさが伺われる現象だ。

「てことは2位!？」

ぼくはちよつと遅れてそのことに反応した。ライもいまの間を不審に思ったようだが、それを空気に出したのはほんの一瞬で、すぐに苦笑に直した。細かいところまでアカラサマでないのは流石だ。

まあそれは置いて、

「オレってすげー」

順位のこと、自画自賛してしまう。

前回は80人中7位だった。だいたい15位くらいが、合格者のボーダーライン。特級で切磋琢磨する中、順位を上げるのはかなり大変なことなんだ。

「なにか特別なことでもしたのか？」

ライは足を組んだ。

「いや別にこれといって」

正直に答えた。するとライは模範的な笑みをうかべる。

「ふうん。セオリー通りの優等生の答えだな」

ぼくはドキツとした。なんだかライの瞳の中に険があるような気がした。なんとなくだから自信ないけど。

もしかして、嘘をついたとも思われたのだろうか。でもほんとういままでどおり普通に授業を受けて、勉強時間だつて増やした覚えは無い。これ以上なんて答えればいいんだろう。

あれ、待てよ、ていうかその前に、そんなこと責められるいわれなんかないよ。

第一ライ本人が、どうあがいても誰も敵わないような天才タイプだ

って地元でも有名だったらしいから、ぼくがガリ勉していようがいまいが気にすることでもないんじゃないかな。やっぱ気のせいかな。困惑しているぼくを見てライは、

「俺、そう答えて失敗したことがある」

と言った頭の後ろで腕も組み、そのまま椅子に軽くのけぞった。

ああそうか。たぶんライは、さっきのぼくみたいに答えて、嫌な空気を向けられたことがあるんだ。それで何か思い出したんだろうな。きつとそうだな。

「ライ、小神殿のことなんだけど」

そう言っただけで、ライは欲しい答えをくれた。

「犯人の目星は付いてないらしい」

ライの父は警察関係者だ。だから何か情報が得られるかなって思ったんだけど、聞かなきゃ良かったな。

「そっか」

ぼくは肩を落とした。もう話題を変えよう。

「ライは、家族そろって本州に行くんだよな」

ライの父は今年度で島警察の任期が切れて、来年度に家族そろって本州で新生活をはじめるとのことだった。年度始めは9の月だから初秋だな。

「ティオンは寮住まい？」

「ああ、なんかせいせいする」

そしたらやつと小言から開放されるんだ。待ち遠しいくらいだよ。

「ふうん。不安はないのか？見知らぬ土地で、勉強も大変でさ、しかもハイレベルなライバルたちに囲まれて」

「別に。行ったら行ったでなんとかなるんじゃない？ていうか、それならライも同じだよ」

「まあ、そうだな」

「それに地方出身のやつなんて、ほとんどは寮だし。みんなができるならオレにもできるよ」

ライは軽く目を見開いた。

「ティオンって、強いんだな」

「そう、なのか」

よく分からないけど、ほめられてしまった。別に、特別な事なんか言ったつもりはなかったんだけどな。でもまあ、悪い気はしないからさ、素直に喜んでこう。

妙に照れてしまつてぼくはライの方を向いていられなくなった。あさつてを向こうとすると、

「ティオン、言い忘れたことがあるんだ」

ライの声に止められた。

「何？」

「小神殿な、実は不審な点があるらしい」

ぼくは突然真顔になつて迫つた。ライは引いているが、気にしてないといられない。

「変な話なんだけど、まあ、落ち着け、くだらないって笑うような事だから言い忘れてたんだ」

「早く言え」

ぼくはさらに迫つた。もう鼻先がくつきそうな距離だった。だからライはぼくの両肩を押しやる。ぼくはそれでもまだ迫ろうとする。

「わかつた、離れたら言う」

すんなり離れてやつた。ライはため息をもらす。

「どうやら神殿の破損部に、歯形らしきものがあつたそうだ」

ぼくは口を空けたまま固まつてしまった。

「なにそれ」

「な？おかしいだろ」

「なんだそれ」

「どうした、笑えよ」

「見に行く」

「は？」

ライは目を見開く。

「何しに行くんだよ」

「だから、見に行くつつつてんだよ」

「まさか、今からか？」

ぼくはうなずいた。

「ここからだって、近くないだろ。俺はさすがに行けないよ」

「1人で行く」

ライは面食らって何か叫んだ。でもぼくはライの言葉も聞かず、ベットのかばんとコートをわし掴み、そのまま階段を滑るように降りた。裏口を通ろうとするが、急ブレーキして店先へ行く。上からまたライの声が聞こえたが、耳を通過してしまう。

「母さん、ライの接待して!!」

カウンターの母さんに捨て台詞。

「は!？」

母さんがその後なんて言ったのかはわからない。ぼくはすでに通りを走り、バス停を目指していた。

時計を見るともう5時近い。ぼくはまた、ぜいぜい息を切らしながら町はずれの小神殿に来ていた。

冬は日の沈むのが早くて、太陽は西の山々にさしかかっている。南には遠くまで広がる街並み。その先の入り江、輝く海原。島全体はオレンジ色に染まっていた。

島の中心ではアングルド大山がきれいなような、不気味なようなたたずまいで全てを見渡していた。

ぼくは小神殿のほうへ歩く。人影はない。太い紐で張り巡らされて『立ち入り禁止』の看板がいくつか吊るされていた。

小神殿は本当にこぢんまりとした神殿で、もともと神官は住んでいない。この小山のふもとに交代で住んで、管理の必要からひとりふたり見回りに来るだけだった。これからはどうなるんだろう。

さまざまな検証は、もうなされた後のようだ。文化財として重要

なものだろうから、下手にさっさと撤去もできず、とりあえず立ち入り禁止にしている、といったところか。

ぼくは躊躇せず、紐をぐり中に入った。

どうしてもいま、来なくちゃいけない気がしたんだ。この目で確かめたら、もしかして何か分かるんじゃないかって思ったから。ぼくは何かの専門家ってわけじゃないけど、こればかりは人任せにするなんて、とてもじゃないけどできなかった。

ぼくは手当たりしだい、瓦礫を見て回る。けれどおかしな点なんてどこにもない。

「歯形ってなんだろう」

きつと、そう見えるなにかがあるはずだ。

と、そのときぼくは妙な音を聞いた。

じつと息を殺して、神経を集中する。なにか、ゴリゴリという、硬いものがこすれるような音だ。かすかな音。

心臓が早鐘を打つ。冷や汗がつうつと頬を伝う。逃げ出したほうがいいのだろうか。

いや、ここまできて、まだ何もわかっていないじゃないか。腹を決めろ、ティオン。

ぼくは唾をのんで、胸のあたりをかるく叩いた。よし、いける。できるだけ気配を消し、音のするほうに歩み寄った。

崩れた壁にぴったりと背中を押し付け、その影から、そうつと裏をのぞこうとする。なにかの襲撃に備え、しつかりと構えて、しかし逃げの構えも同時にして、裏を、そうつと見た。

「う……」

ぼくは目をひくつかせた。思いつきり力が抜けた。

なんの事はない。少なくとも想像していたよりもずっと。

そこには小汚い茶色いフードを被った女の子が、壁に背を向けてしゃがんでいた。両手には神殿の白いかけら。たぶんすり合わせてゴリゴリやっていたのだ。

力いっぱい警戒してこれだ。ぼくは変な気恥ずかしさから妙にむかついてきた。

むっとした表情で女の子を見下ろす。顔はフードに隠れているけれど、袖から見える手首とか指の感じがどう見ても女の子のそれで、背格好から考えてぼくとそう変わらない年頃のようなうだ。

そんなやつが、こんなところで一体なにやってんだよ。人のこと、驚かせやがって。

勝手にビビってたってのはこのさい置いといて、ほんとに腹が立ってきた。

「おい」

ぼくはかなり不機嫌な声で呼びかけた。女の子の肩がびくつと揺れる。

「あ、おい！」

少女は突如走り出そうとした。驚いて、ぼくはとつさに彼女のフー ドを掴んだ。

反動でくいつと一瞬彼女の首が絞まり、女の子はかるくのけぞって、しりもちをついてしまった。

「え……」

いきなり目に飛び込んだのは彼女の真っ白な髪だった。

不揃いなおかつぱは、まぎれもなく純白。こんな髪の色は見たことがない。女の子はぼくに背を向け、うつむいたままだった。

「あ」

ぼくは面食らったまま掴みっぱなしのフードを見た。かなり強くひっぱってしまっただから、首、痛いんじゃないかな。悪いことしたな。気が動転して、ぱっと手を離す。けれど彼女は逃げなかった。

「……イオン……」

女の子はちいさな声でつぶやいた。なんだ、いまのは。

なにかの聞き間違いかとおもったけれど、その声は今度こそはつきりと聞こえた。

「ティオン……」

ぼくは後ずさった。

「ティオン……」

女の子はその言葉しか知らないみたいにくり返した。ぼくは何が何だかわからなくて、動くことさえできない。

そうこうしているうちに、彼女はゆっくりとこちらを向いた。

「あ……」

ぼくはさらに後ろへ引いた。

女の子は、作り物みたいにきれいな顔をしていたんだ。

肌は象牙くらい白くて陶器のように滑らか。切れ長の大きな瞳は、深い森を思わせる澄んだ濃いグリーン。すっと通った高い鼻に、うすく色づいたちいさな唇。

どこまでも整っていて、髪の色と合わせると天使をおもわせた。

あれ、待てよ、てことは……。

「もしかしてぼくは、知らないうちに死んじゃったのか？」

突拍子もないことを口走って、とっさに頭を振った。いまのアホらしい発言による反応を見るために、彼女の方を見たけれど、女の子は無表情で首を傾げてみせる。

「ひょっとして、言葉が通じないのか？」

首がさらにかたむく。

「どうしよう」

落ち着け。思うにこれって人生最大の事件になるかもしれないんだぞ。

廃墟となった神殿、謎の少女。おそらくは異邦人だ。小汚くてボロいフードのコート一枚を着て、隠れるようにうずくまっていた綺麗な女の子。

「もしかして、人身売買でもあったのか？おまえ、そこから逃げてきたんじゃないのか？」

やはり少女は表情を変えず、大きな目をぱちくりするだけだった。

「ティオン」

そうだ、大事なポイントを忘れてた。なんでこいつ、ぼくの名前を

知ってるんだろ。しかもぼくの顔も見ずに呼んできたし。

「なあ、おまえは誰なんだ？」

だめモトで聞いてみたけどやっぱりだめだった。

ぼくは自分を指差して。

「ティオン」

と言う。そして少女を指差した。もう一度同じ動作をして、再度彼女を指差す。

すると女の子は軽く目を見開きはっとして、

「フューイ」

とだけ言った。

「はあ?!」

ぼくは表情筋をフルに使って『なに言ってるの』という顔をした。すると彼女はぼくを指差し、

「ティオン」

それから自分を指して、

「フューイ」

と言った。ああそうか、そうきたか。まあ、ちゃんと考えれば想像もつくよな。これだけ綺麗だったら、親にしたって娘に女神の名まえくらい付けたくなっちゃうか。しかしまあ、マニアックだな。なんだってこんな地方の島の女神の名まえなんか付けるんだよ。なんかの神話の本でも読んで、知ったとかなら納得いくけど。

「じゃあフューイ、おまえ、ここで何してたんだ？」

またもやフューイは目をぱちくりさせた。ああもう、めんどくさいな。ぼくは神殿の白いかけらを拾い、フューイにそれを手渡して指差した。つぎに彼女を見る。

「なにしてたんだ」

フューイは聞いていないのか、じいっとその石を見ている。

すると何もいわず、彼女は石に顔を近づけていき…。

「え」

そのまま。

口をあけて。

かぶりついたんだ。

「う、うお」

フューイは石を、パンみたいにほおばってゴリゴリやっている。食っている。さっきの音の正体はこれだ。

ぼくは腰が抜けてしりもちをつき、そのままの姿勢でカサカサと後ずさる。

「お、おおお、お、これは、な、なな、うおお」

大混乱して口をパクパクさせる。たぶん顔は真っ青だ。怖い。

けれど目が離せない。

ゴリゴリ…ゴリゴリ…

ぼくの頭もかじったら、あんな音がするのかな。と思った瞬間、恐怖が頂点に達した。本能が逃げると言っている。けれど背中を向けたら追いかけてきそうだ。

身動きが取れない。けれどこのままじゃ…。

「ティオン」

「よ、呼ぶなあ!!」

ぼくは涙目になって叫んだ。なんだっていうんだよ。なんでぼくのこと知ってるんだよ。なんで石食うんだよ。わけわかんないよ。

「ティオン…」

ぼくの訴えをよそに、フューイはまた呼んだ。

「黙れよ!! だいたい…」

言葉は途中までで途切れた。フューイが、うすく微笑んでから、どういふつもりか突然歌い始めたからだ。

「チュメタイクアデニ フクアレタラ

アツクアイ オウティニ クアエイマヒヨ…」

知ってる、このフレーズ。発音は変だけどこう言っている。『冷たい風に吹かれたら、あったかいお家に帰りましょ』

「なんで…?」

フューイは続ける。

「クアナシイ クイモツイニ ナツタナア…」

悲しい気持ちになったなら。そうだ、僕は続きを知ってる。

「きれいな おはなを さがしましょ」

ぼくが歌うと、フューイは半分開いた目でぼくを見て、またうすく笑った。

どういふことなんだよ。だって、その歌。

「おまえ、それ、どこで聞いたんだ？」

ガキのころぼくは、よく女神像の前に来て泣きながらその歌を歌っていた。ちよつとバカらしい話なんだけど、悲しいことがあるたびに。

どこかの本で見た詩に、子供特有の自作のメロディーをつけて完成させた歌だ。誰かの前で歌ったことなんかない。

ぼくは立ち上がり、フューイの像のあつた台座のほうへ行き、試しにそこを指差してみる。

するとフューイも立ち上がり、ぼくのほうへ来て、ガタガタになつたその台座の上に立って微笑んだ。

いったい、なんだっていうんだよ。まさか、おまえがあの女神像だともいふのかよ。ありえねえよ、そんなの。絶対信じるもんか。

だいいち姿だつて全然ちがうじゃないか。しかも女神像はこんなガキじゃなかったし、背丈は階段2段分くらいの大きさだ。

だからといって、じゃあなんだと言われれば、結論なんか出せない。ぼくは何かの専門家でもないし、結局なにを目の当たりにしても、なんの答えも出せやしないんだ。

保留にするしかないじゃないか。結局わかっていることは、こいつが石を食う怪物で、ぼくの名まえを知っていて、あの歌を知っているって事だけなんだから。

そうこうしてる間に、フューイは台座をかじり始めた。

ほんとうに、人生最大の事件だ。こんなわけのわかんないものに遭遇するなんて。

「ありえねえ……」
でもそのときのぼくは知らなかったんだ。
その「人生最大の事件」が、それから容赦なく更新され続けることになるなんて。

「あんだ、なに考えてるの!!」
目を吊り上げて、赤鬼になった母さんが、家全体を揺るがすように怒鳴った。覚悟はしていたが、やっぱりすごい迫力だ。父さんが奥で苦笑いしている。

「あれから大変だったのよ!ライ君たら怒った様子も無く『おいとましますね』とか言ってくれて、母さんは身の縮む思いだったわよ! ! ! だいたい昨日もやたら遅い時間に帰ってくるし、どついういう事なのよ、いい加減にしてちょうだい!!」

「昨日の分は昨日怒ったからいいじゃん……」
まずい、口が滑った。

「ティオン!!」
落雷だ。

ぼくは強烈な平手打ちを食らい、それから夕飯抜きでみつちり説教されたのだった。

「うあ、疲れた……」
さんざんしぼられて、へとへとになってから部屋にたどり着いた。思ったとおり母さんは、ぼくがコートを着て帰らなかったことには気づかなかったようだ。

ぼくは窓際に向かう。1時間ちかく待たせちゃったな。
窓を開け、下を見る。通りと反対側の裏庭にいる人影に手を振った。

ぼくのコートを着たフューイだ。あのまま置いてくるのはなんとなくかわいそうだと思って、子犬や子猫を拾うノリで、連れてきてしまったんだ。

これは、ぼくなんかには目もくれず白い石ばかり食べていたので、人畜限定に無害と判断した結果だ。

フューイには、ボロコートじゃバスに乗せられないからって、ぼくのロングコートを着せてある。まあ裸にコートで、髪の毛を隠すためにフードを被っている、なんてスタイルじゃ、人からの冷たい視線は免れなかったんだけどね。近所の人に見られないように、裏道使って大変だったよ。

フューイも手を振り返す。そして、ぼくはよく本で読むようなことを実行した。つまり、カーテンとかシーツをつなぎ合わせ、ロープを作って垂らしたんだ。地面には届かないけれど、フューイが掴めるくらいには長かった。

あれ、でも本ではこのロープの先っぽを、どこにくくりつけてるんだろう。この部屋には柱もないし、ベットの足にくくりつけなかったら、すれて母さんたちのいる

1階の部屋に響くぞ。

ぼくは下を見た。開けっ放しの窓からは、信じられないくらい冷たい風が入ってくる。

フューイのコートが寒そうに揺れる。

やるきゃっないね。

「ん、う、くううう」

ぼくは、こめかみの血管が切れるんじゃないかってくらい、力を込めて手製ロープを引っ張った。声もできるだけ控えめに、柱の代わりをはたそうとする。

でも、なんかおかしいぞ。引っ張ってるのにいつまで経っても登ってくる気配がない。重さはかんじるのに、どうしてだろう。

一度力を抜いて外を見下ろした。するとフューイはロープの先を掴んでいるだけだった。

ちがうよ、ぼくが引き上げるんじゃないくて、おまえが登ってくくる

んだよ。くやしいけど、そこまで力はないんだぞ。

ぼくはまさに言葉に表せないくらいの苦労をして、ジェスチャーでそれを伝える。引つ張り合って確認し、ようやくフューイが登ってきた。

ドサッ

登りきったとき、フューイも疲れたのか窓枠から落ちてきた。しかもぼくの上に。

「痛えな…」

重いので腕で押して、どかした。すると彼女のコートがはだけて足の大部分があらわになった。ようするに、腿^{もも}とか…。ついでに髪が乱れて白いうなじまでのぞく。うつろな瞳なんかも。

ぼくは急いで目をそらし、彼女からすばやく離れた。

「ティオン…」

「こつちくん、いま、ちよつと待って」

手をぶんぶん振って、顔で語る。ちよつと、落ち着けよ、オレ!! フューイはまた無表情で首を傾けた。

とまあわかる人にはわかるピンチを乗り越えて、ぼくは平静を取り戻した。

その後窓を閉めて、部屋をもとのように戻し、フューイを薄手の毛布でくるんで、ぼくは人心地つく。カーテンやシャツがよれよれしているのはまあ、洗えば直るか。

「外寒かつたろ」

何をどうエネルギーにしてるのか、フューイには体温があつた。だから当然寒いところにいたら冷えるだろう。当然なんて言葉があてはまるかどうかは別として。

ぼくは一度下に降りてホットミルクを作って持ってきた。

「飲んだら？」

フューイはカップを受け取った。けれどそれを飲もうとしない。カップの熱いうちはそうっと、持ちやすい温度なったら心なし、いとおしそうに持っていた。

やっぱり相当寒かったんだな。表情の変化は小さいけれど、よく見るとわかるのが面白い。

「やっぱり飲まないのか？……て、おいっ」

フューイはカップをかじった。カップには歯形がついている。ぼくは口をわなわなさせる。

一時忘れかけてた怪物つぷりを、まざまざと見せつけやがって。こんな調子でこいつ、文化財たる神殿を食ったんだ。ほんとにもう、なんでさっき、こんなやつに変な気なんか起こしちゃったんだろう。見れば、フューイは眉根をよせて『まずい』という顔をした。なにそれ、味の違いつか、好き嫌いとかあるわけ？

「ってああ！もう一箇所食って確認すんなよ！！」

フューイはカップを再びかじり、味の確認をした。思った通りまた『まずい』って顔になる。

ぼくはカップを取り上げて、中のミルクを飲みほした。うえ、ちょっとかけらが混ざってたみたいだ。

フューイはぼくの様子なんか意に介さず、部屋を中心に吊るされた電球を眺めている。

これはもはや…。

「電球食うなよ……だから食うなって！！」

ベットに立つてから電球に顔を近づけていくフューイの頭を、ぼくもそこに立つて、大急ぎで両手で掴んで固定した。

ティオン、なにしてるの？

下から母さんの声。ぼくはどきつとした。でも思い直す。

母さんは昼間でなければめったなことがない限り、普段は上には上がってこない。夜はぼくが勉強しているからだ。夜食を持ってきてくれることもあるけれど、今日はさすがにないだろう。いまだってちょっとうるさかったただけだし。でも、気をつけなければ。ぼくは枕の上に座り込む。フューイはまだ立ちっぱなしだ。

「座れよ」

ぼくは小声で言っ、布団をばんばん叩いた。しかし彼女の反応はない。仕方ないのでぼくはもう一度立ち上がり、彼女の肩に手を置いて、重さをかけて座らせた。ったくもう、こいつ言葉が通じないだけじゃなくて、ひどく察しが悪いんだ。

時間はまだ相当早いんだけど、ぼくは2つのベルが付いた目覚まし時計を枕元に置いて毛布を被る。

フューイが普通の女の子なら、ベットに寝かしてぼくは別のところで寝るんだろうけど、相手は怪物だからそんな気使いはしない。それにこの寒さは耐えられないし。

フューイはぼくの真似をして、ぼくの横にころんと横たわった。厚手の毛布は3枚あって、2枚をいまぼくが被っている。怪物とはいえ『入ってこいよ』なんて口が裂けても言えない。

やつぱり外見は同世代のむちゃくちゃ綺麗な女の子だ。

「ぼくのコートも着てるし、平気かな」

ぼくの言葉なんか関係なしに、フューイは長いまつげを伏せる。

また不思議なことに、それからすぐに寝息を立てはじめた。

まるで人だな。ものすごく変なものばっか食べるけど…。

ぼくは垂らしていた紐を引いて証明を消した。

そしてさらに不思議なことにも気がついた。こいつ、汗までかくのか。

「おまえの頭、臭えくせ…」

明日になったら洗ってやろう。マジにおまえは何なんだよ。

今日はほんとにいろいろなことがあったな。思ったよりも相当疲れていたのか、まぶたを伏せると、すぐに意識は沈んでいった。

chapter 1 人生最大級の事件（後書き）

ここまでお読みいただき、誠にありがとうございます。次回、とてもなく胡散臭い人物が登場します。乞うご期待ですm（> <）

chapter 2 更新

ジジジリジジジ...

ベルの音、なんか変だぞ。

ぼくは目をさます。けだるい身体。よれたシート。横には絶世の美少女。…とまあ、男が見がちなドリームだと世間に浸透しているようなシチュエーションは置いとして。

ぼくはフューイのほつたを両手で挟み、ぐにぐにやった。彼女は迷惑そうに眉をしかめて充血した目を開く。まだ眠いらしい。でもそんなの気にしていられない。ぼくは顔に青筋をうかべながら表情で『ベル、食うなよ！！！！！！！！』と訴える。

目覚まし時計のベルは、見るも無残に食い荒らされていた。ハンマー部分が戸惑うようにうるうるして、申し訳程度に残ったベルに時々当たってむなく音を出していた。

お気に入りのネジ式目覚まし時計、高かったのに。機能はほぼ無事だったから、ベルの部分を交換してもらおう。修理代、かかるなあ。

「静かにしてろよ」

部屋のドアの前で、フューイに一応いつておく。

現在午前4時30分。まだ日は昇ってないから真っ暗で、夜の気配が色濃いつていう時間だ。

とりあえずこんなに異常に早起したのは、母さんたちに見つからないように、こっそり家を出るためだ。

実際、目覚まし時計が鳴ったのは4時。月2日の休業日以外、父さんと母さんは、パンを焼くために5時には起きてきて活動を始める。だからその前に家を出なくちゃいけない。

特別学級に行く前は、生地の仕事みとか、朝の店開きの準備とか手伝わされてた。最近は毎日の掃除と、二フル（休日）の朝の仕事く

らいかな、手伝えるのは。

フューイは、綿製の薄手の服を2枚と、その上にセーター、ちよつとよれたぼくのコートに厚手の短パンにロングブーツといういでたち。

ロングブーツは以前、ばあちゃんにもらったものなんだけど、ぼくにはちよつと派手で、女の子向けに見えたから、クローゼットの奥に潜ませていたんだ。ブーツは以前のぼくのサイズで、フューイの足にはぴったりだった。日の目を見てよかったな。

とまあそれはいいんだけど、恐れていたとおり、フューイの着替えを手伝わなきゃいけなかった。

できるだけ見ないように気をつけたんだけど、彼女の姿が限りなく人間に近いっていうのはわかってしまった。ほんとオレって…。

で、でも、できる限り急いで現在仕度は完了した。

「うえ、寒い」

家の中でも、毛布から出るのに多大な勇気がいるくらい寒かった。ましてや外は、殺人的な極寒の世界だ。ぼくらは身震いして、上下の歯をがちがさせた。

濃霧に包まれる暗闇の町。階段だらけの入り組んだ路地に^{ひとけ}人氣はまだない。

ぼくが灯りをつけると、ぼくらの周りだけがぼんやりと明るくなった。

「うーん…」

それにしても、どうしよう。

フューイをあのまま家に置いておくのが不安で、連れ出しちゃったけど、とくに何をする予定もないな。まだバスは走ってないし、持ってきた目覚まし時計を修理に出そうにも店が開いているわけないし。とりあえず市場にでも行ってみようか。

無言のまま、暗い道をふたりで歩く。歩き続けたらちよつとは寒さ

にもなれるかなって思ったんだけど、ちつとも温まらない。たぶん、昨日昼から何も食べてないせいだ。

電灯のある通りに出て、ぼくは灯りを消した。

歩きながら横目でフューイを見る。ぼくは、すこし高くなった歩道を歩いているのに、車道を歩く彼女のほうが背が高い。

横に並んでいたくなくて、ぼくは歩調を速めて彼女の先を歩く。けれどフューイも真似して速く歩き始めたから、並んで競歩をしている状態になった。まるで意味がないから、結局、もとの速さにもどす。

なんだか疲れてしまって、歩道と車道の小さな段差を椅子に見立て、ぼくは座り込んだ。

腹減ったなあ。しくじった、パンのひとつやふたつ持ってくればよかった。気持ち之急いたにしても、痛恨のミスだ。もう、いままら取りには行けないし、我慢するしかないか。

ふと、幾度となく感じた空気が流れる。

フューイはどこだ。どこにいる。視線をスルーさせていくと…。

「何してんだ、こるあー!!」

まさにいま民家の壁の角をかじっているフューイの姿が目飛び込んだ。

早々に駆け寄り、二口目^{ふたくちめ}にいかうとする頭をペシッと叩くと、渋い顔をしながら彼女がふりむく。ああもう、角が欠けてるじゃねえか。「なんだ、文句があるなら言ってみろよ」

名残惜しそうにレンガの壁を眺めてから、フューイは恨めしげな目で語った。

容易に想像がつくね。『なんで？ ティオン私の邪魔するの？』 だろ？

「ここは人が住む家だからだよ！ レンガが気に入ったんだからねえけど、この島の建物はほとんど人が、いままさに、使ってるもんなんだよ!! おまえが食っていいもんじゃねえ！ 聞かなくても理解しろよ!!!」

ぼくが説教たれているのは、鈍なフューイにもわかったらしい。

唇をちよつと突き出して、不満をあらわにしてみせた。

その後、立ち並ぶ家々や、ちよつと欠けた階段や、今は何も咲いてない花壇のレンガを恨めしそうに眺めているフューイを横目に見つつ、ぼくは気が気じゃなかった。もう、いいかげんにしてくれよ。またしばらく歩いているうちに、町は少し明るくなった。まだ夜明け前だけど、朝の気配がそばにあるのを感じる。人もちよつとずつ、見かけるようになった。目立ちすぎる白髪を隠すため、フードを目深に被ったフューイを一瞬不審がる人もいたが、ぼくらが堂々としていたから、そんなには気にしなかったみたいだ。

「おまえ、その髪の毛を隠すっていう知恵は、一応あったんだな」
彼女は昨日今のようになり、不揃いの真っ白なおかっぱを隠していた。けれど次に向かいから風が来たとき、彼女がフードを押さえるのを見て訂正した。いや、たぶん知恵じゃなくて防寒のたまものなんだろうなって。

「しっかし、すげえ冷えるな」

夜明け前がいちばん寒い。青い町は霧のなかにある。もしも雲の上の町があつたら、こんなふうなんだろうなって、ぼくはぼんやりと考えていた。

ほどなく電灯が、いつせいに消えた。

時刻は5時30分。

市の行われる広場は、すでに人々でこつた返していた。ぼくはフューイの横髪を耳にかけてやり、白髪がさらに目立たないようにした。そつえば髪、洗ってやんなきゃな。

「あつちに出店がある」

この島の人たちは自営業でないかぎり、ほぼ毎日の朝食は外でとる。それは飲食店であ

ったり、出店であつたり、家族たちはそれぞれのペースで朝をすこ

す。

ぼくん家の店にも奥にフロアがあつて、朝は忙しい。平日の朝と夕時（こっちはもっぱ

ら買い物、フロアは暇）は、パートさんに入ってもらつてるんだけど、ぼくが特別学級に通い始めてからは1人増やして3人になった。みんな優しいおばさんだ。

うちは自営業だから、ぼくん家には家族＋パートさん（平日）との朝食っていうのが週

慣づいている。こうして外で食べるのは久しぶりだった。

「へえ、ニフル（休日）でも結構、店が来てるんだな」

勤め先や学校へ行く人も、ニフルには自宅で食べることが多いんだけど、こうして市場にくる人たちのために出店が来ている。でもこんなに多いとは思わなかった。

ぼくらは市を通つて、目的の場所へ歩を進める。野菜売り、果物売り、魚売り、雑貨、アクセサリー屋、籠やら靴やら草鞋まで売っている。フューイはそれらを物欲しそうに見ていた。

「どうした？」

なにか噛み付きたいものでもあつたんだろうか。フューイはアクセサリー屋で立ち止まり、しゃがみこんで品物を見ている。視線の先は、翡翠のペンダント。

「それ、いくら？」

フューイが今にも石に噛み付くんじやないかつて、ハラハラしながら、ぼくはそれを買った。

壊れた目覚ましの入ったかばんから財布を取り出す。修理代、足りなくなつちやつたな。でも背に腹は変えられない。

「ありがとうございました」

首飾りを受け取ると、女店主のさわやかな声を背中に、ぼくはフューイの手をひいて、足早にその場を去った。

フューイはぼくの手にある碧の石をじっと見ている。もうちょっと待てよ、ぼくもなにか買ったら、人気のないところを探して一緒

に食べればいいだろ。

そんなぼくの様子を見て、フューイが唇をかみながら、ぼくを睨みつける。

『なんで、その石くれないの?』って、そういう目だ。

「な、なんだよ」

急に睨まれたもんだから、ちよつとむかついた声で答えてしまった。すると彼女はぼくの手から首飾りを取り上げて、そのまま噛み付いたのだ。

「あ、おまツ、こら」

しかし幸いフードと喧騒に隠れ、音も事態も目立たなかった。ぼくはフードを軽くパシツとたたく。ほつとするのもつかの間、目の前には鼻水を垂らした幼い少年がフューイを見上げていた。

まだ小さなその子には、フードの中の秘め事が見えていたはずだ。

ぼくは冷や汗をかいた。

騒ぐか、と思った。けれどその子はひどくおっとりした様子で、パリエの店主である母親のところに行き、

「かあちゃん、翠の石って食べれるの?」

と言った。しかし、

「何言つてんだい」

と小突かれて取り合ってもらえなかった。ぼくはほつと胸をなでおろす。

「ピンチだったなフューイ……い?」

横にいたはずのフューイがいない。ぼくはあたりをキョロキョロ見回した。なのにとこにも見当たらない。

鼓動が早くなる。ぼくは考えうる最悪のことを思い浮かべた。

いまにもどこかで悲鳴があがらないか、ざわめきが起らないか……。ぼくは人ごみをすり抜けて、息を切らしながらあちこち探し回った。捕獲されるフューイ、いままに何かにかみついているフューイ……。誰かに捕まりでもしたら、どっかの研究所かなんかに送られて、解

割されちゃうかもしれない。さまざま悪いことが頭をめぐつて、思うように足が運ばない。

大体、食べ物の恨みくらいで、あんなムキになんなよな。ぼくの何が悪いんだ。ものの道理がわかっていないあいつが悪いんだろ。でもまあ、あいつの身になってみれば、ちよつとは悪いことも、したような気もさ、しないでもない。見つけたらどつか別のところにも、連れてつてやろう。

だから、頼むから問題は起こすなよ。ぼくは強く思って、また人ごみをすりぬけながら広場を探しはじめた。

「お母さん、わたしに本当のことを教えて」蝶子は言いましたあふと、足を止めてしまった。

なんだろう、ああ、紙芝居か。それにしても、ちよつと内容が重くないか。でも絵柄はかわいい感じで、そのミスマツチに惹かれた大人や子供が見入っている。

話し手は薄紫色のコートをまとって、広間の端の、花のない花壇の淵に腰掛けていた。

裾の長い上着は、袖が肘から手のほうにかけて広がっている形で、フードを被り、目から下を布で覆っていて、まるで典型的な占い師みたいな格好だ。

「お母さん蝶ちょは、まだ青虫の蝶子に、真実を話しましたあー」しゃべり方はどこか変わっているけれど、占い師もどきの声は、喧騒にもよく通ってる。男とも女とも知れないふしぎな声だが、とても澄んでいる。

よく見ると目元も怖いくらいに綺麗で、深い青の瞳が宝石みたいだった。並んだら、フューイの深緑の瞳にも劣らないかもしれない。その神秘的な様子に、紙芝居ではなく話し手にばかり注目している若い男たちもいるくらいだ。

「あ、フューイ」

人々の間から彼女の姿があらわれた。

よかった、あいつ、大人しくしてたみたいだ。ぼくは心の底から安堵する。

フューイは紙芝居に見入っていた。そうか、絵なら理解できるんだな。この話はちよつと難解そうだけど、絵そのものを見るのは楽しいのかな。

「お母さん、わたしの本当のお父さんは蛾がなのね！わたし、本当は蛾がの幼虫だったのね」

蝶子は泣き叫びました。

「違つたよ蝶子、あなたはガとチョウのハーフよ、ガ・チョウよ！
！」

「いやよ、そんな鳥みたいなのッ！」

すげえ変な話だな。って、ひそかにツツコミを入れながら、ぼくはフューイの方へ行つた。

ぼくの顔を見ると、彼女はぷいっとそっぽをむいてスタスタと歩き出す。

「ちよつと待てよ」

しかたなく、ぼくは後を追つた。

「見いつけた……」

去つていくぼくらを見つめながら紙芝居屋がこんなことをつぶやいた。

でも、そんなことぼくらが知る由もない。紙芝居をいちばん前で見ている女の子が、不思議そうに小首をかしげた。

「おーい、おまえら何してんだあ」

声をかけられて、ぼくは振り返る。

「フューイ」

彼女はこつくりとうなずいて、壊れたやかんから口を離す。

「ちょっと探し物、してるだけでーす!!」

ぼくは入り口に向かって叫んだ。

「ああそうか、まあ、頑張れよー」

「どーも」

ぼくらはいま、市場から徒歩10分のゴミ捨て場の倉庫にいる。

とりあえず、そこらにあつたガラクタを適当に食わせたんだけど、へそを曲げたフューイも何とか機嫌を直してくれたらしい。このころになってようやく、彼女はぼく以外の前で食事しちゃいけないってことを理解してくれたみたいだ。

「でもこれじゃ足りないだろ、やっぱ神殿跡に行こう」

こいつ、金属も食べるみたいだけど、あの白い石が好きみたいだし。外に出て、持っていたメモ帳に神殿の絵をかくとフューイはにっこり微笑んだ。

「なんじゃこりゃ」

石畳と階段の道を歩き続けて目にしたのは、神殿に続く長い階段に張り巡らされた太いロープ。そのまえには軍服を着た体格のいいおっさんがいた。ほかに2、3人の軍人がいる。島の北には基地があるから、軍人そのものは珍しくないんだけど、この小山とはミスマツチだ。

「いったい何事なんですか？」

ぼくが尋ねると、ロープ付近のおっさんは一瞥くれただけでなにも言ってくれなかった。なんだよ、感じ悪いな。

「行こう」

ぼくはフューイの手を引いて、いったんその場から引くことにした。

「あなたたちも、追り返されたましたか」

階段からすこし離れたベンチに腰掛けていたら、頭の上に声がふってきた。イントネーションから異邦人ってわかる。

「ええ。感じ悪いっすよね、あいつ」

ぼくがいうと、異邦人は首を傾げながらすごく穏やかに笑った。黄みのある肌の、20歳くらいの男の人だ。黒髪が異国を感じさせる。「ワタシ、シドウ・リュウいいます。あ、シドウが姓です。よろしく」

そういつて右手を差し出したから、ぼくらは握手した。

そのとき、フューイがこうつぶやいた。

「ラム・ア・ヴィアヌ」

するとシドウさんが驚いたように息を呑む。

「どしてそれを？この国来て、ワタシその言葉、知ってる人、初めて会いました」

「なんですか、それは」

ぼくは間髪いれずに聞いた。

「母国な祈りの言葉なのです。ワタシ、この上の神殿の像に、いつも故郷のこと想ってお祈りしてたです。まさか、こんなところでその言葉、聞くんなんて……。ほんと嬉しいです。で、その方ていつたい……」
ぼくは質問に答えるどころじゃなかった。頭の中がグルグルまわる。ちよと待てよ、てことは何か？その言葉を知ってるって事は、やっぱりフューイ、おまえがああ石像ってことなのか。

ぼくの動揺をよそに、シドウさんはフューイのことを聞きたがっている。でもさ、

ほんとうに聞きたいのはこっちのほうだよ。

「お答えたくないなら、無理に聞きません。でも、お会いできてよかったです。あの、よろしかたら、ワタシとすこしお話など、してくれませんか。その言葉、聞いたら、そこはかとなく、昔話とかを聞いてほしくなりまして」

「べつにいいですよ」

そういうと、シドウさんはすごく嬉しそうに微笑んだ。外国の人と話す機会なんてめったにないことだし、視野を広げる絶好の機会かなって思ったから、ぼくはシドウさんの話を熱心に聞いた。シドウ

さんは母国について、詳しく教えてくれた。

シドウさんの国、カケロマはこの島からずうと東の大陸にある小さな国だ。黒髪黒目の単一民族の住まう国で、外交はあまり無いという。この時代にあつて、宗教が重きをなし、王が民を治める縦社会らしい。ぼくの住む国は政府が治める間接民主制で、宗教も盛んとは言えないから、その様相はあまり実感を持って想像できないけれど、とにかく厳肅とか嚴格とかそういう堅苦しい言葉が頭に浮かぶ。

「ワタシの国、とても貧しい国。身分、低い人は明日の命も保障ありません。でもワタシ、故郷のこと愛します。この国みたい豊かなってほしいです…」

ぼくはそこが府に落ちなかった。貧しい国なのに、愛している？大事なのに、どうしてここにいるんだろう。ぼくの疑問をくんだように、シドウさんは続ける。

「いくらワタシのことはくくんで、ワタシ慣れた土地いつでも、あの国いたら家族、飢え死ぬ思たのでした。3年前、隣の国としてい^{せんそ}る戦争が激しいなつて、ワタシのとこ召集令状^{しゅうしゅうれいじょう}、来たとき決意しました。家族、連れて遠い国逃げようと…」

「そうして正解ですよ」

ぼくがいうと、シドウさんは渋面になる。よけいなこと、言っちゃったかな。ぼくは首をすくめる。

「それで、密航船^{みつこうせん}、乗つてこの国とこに逃げようしたんです。でも警察^{けいさつ}にわかりしました…」

「それで？」

ぼくは恐々先を促した。

「ワタシ以外、みんな…捕らえられました。母も妹も弟も…」
場に、一気に暗い空気が流れた。その気まずさに、ぼくはなんていっていいかわからずに固まっていた。どうしよう、今なんて言ってもおこがましい気がする。

「ああ、そんな顔、しないでください。でもワタシ、きちんと希望

のことを見つけましたから」

シドウさんていい人だな。助け舟をだしてくれた。

「なんですか？」

ぼくは先をうながせた。

「この上の女神像です。仕事場の工場は朝早いんです。夜も遅いんです。今日まで様子を見に来るしませんでした。あの女神像、ちよつと母、似る気がして、とても好きに思います」

ぼくは今度こそいふべき言葉を失った。その女神像、この人は今はもう上にないことを知らないんだ。昨日の新聞にも神殿大破って書いてあっただけで、女神像のことにはふれていなかった。

そもそもこの小神殿自体がマイナーなもので、ましてや裏の女神像なんかに注目する人は少ない。

「そ、それはそうですね。ところであの階段、どうして封鎖してるんでしょうね」

ぼくはすこし話題をそらす。

「ああ、さっきここ通った人言てました。1時に軍、この小山のこ
と見回りするそうです」

「はあ?!」

なんだそれは。

「どーいうことですか？オレ、昨日もここに来たけど特にそんな必要、ないように見えましたけど？ていうかなんで今更…」

「噂は、ずっと臥せてた神官、『白い不気味なものと、黒いおぞましいものがこの山にいる』っていったらしです。神殿壊れた賊が持てる変な武器とか、超強力の爆弾人に似てる未知の生物とかも言われてて、それで、島の北の基地から軍、来て動くらしです。アヤシイものすべて調べるて。いいですね、この国、庶民のため軍、動くなんて…」

いや、めったなことでは動かない。なんせそんなに緊急事態があるわけでもないし、なにか起こっても、大体が警察で何とかするものだからだ。かつてない事件がこの平和な島に起きているということ

に、ぼくは思いっきり戸惑った。そして、その元凶をぼくは知っている。

「い、いったい何なんでしょうね…」

ぼくは引きつった笑顔のまま、フューイの手を引き足早にその場を去った。

これもぼくらの知りようがないことなんだけど、シドウさんは懷から青い水晶を取り出して手で覆った。そしてそれが弱く光を発しているのを見ると、

「まさか…ということだ」

ぼくの理解できない、異国の言葉でひとりごちた。

「まっずいよなあ」

こいつのこと、目撃したやつが他にもいる。予想はしてたことだけど、どれだけの人数で、どんな人に知られたかが問題だ。いや、誰かも重要か。

「ティオン…」

ああ、そうだよな。その前にこいつの食事の問題が先だ。現在午前8時30分。1時までにはまだまだ余裕がある。

「さあ、行くかな」

軍のおっさん達に見つからないように、頂上へ。

かなり大変だけど、小山の裏に回って登山だ。

「まったく冗談、よしてくれよ」

階段からそれた小山の端、ここもまだ町を向いてるんだけど、ここにも感じ悪そうな軍人がいた。これじゃさらに南東の山の裏手から、小山の裏に登らなくちゃいけない。

「なあ、その辺の石じゃだめなのか？」

試しに聞いてみたけど、フューイにとってその辺の石は雑草みたいなものだった。

もう、ここまできたら意地でも登ってやる。

ゴリゴリ…ゴリゴリ…

午前11時。ぼくらは山の頂上にいた。

階段で登って20分かかるこの小山を、ぼくは汗だくになって踏破したんだ。ものすごい達成感。それ以上の疲労感。服も靴も手も顔も土だらけだ。あちこちにちいさな枝までくつついてる。

でもまあいいか。目的は達成できたんだから。もう文句ないだろ、フューイ。

瓦礫のちょうどいいのに腰掛けながら彼女を見る。フューイは夢中で白い石に噛み付いていた。

よかった、連れてきたかいがあるよ。ていうかあいつ、のどは渴かないのか？汗かくんだから渴くだろ。ミルクは飲まないけど水は飲む気がする。あ、むせた。水筒くらい、持ってくればよかったな。

「あれ」

でもおかしいな。あいつ、たくさん食ってるけど、こんなに神殿がぶっこわれるほどには食ってないような気がする。考えれば考えるほど謎だらけだ。

でも、こうして石を食べる彼女を見ながら、彼女がああ石像だっということは、ごく自然に受け入れられるようになっていた。石や金属を食べる女が元は石像なんて、むしろ普通の女がそういうものを食べるっていうより納得がいく。それに判らない事はそのうちに判るようになるんじゃないかって、根拠もなく思うのだった。

「そろそろ行くかあ」

大きく伸びをして、ぼくは欠伸をする。なんだか眠いや。早起きに加えて、かなりの運動量をこなしたものだから、けっこう疲れちゃったみたいだ。今日はもう帰ってゆっくりしよう。

満腹になっ たらしいフューイが、ふうつとため息をつく。
ていうか、明日からフューイをどうやって飼おうかな。ぼくには目
下この難題が待ち構えている。それは帰りに歩きながら対策を練る
としようかな。良策が出るといいけど…。

ガサッ

「大丈夫か!？」

下山の途中、フューイがこけた。どうやら向ここのほうに気を取ら
れて、足を滑らしたらしい。

「どうしたってんだよ」

フューイが注目していたほうをみるけれど、特に何も異常はない。
気のせいだよと言って先を促すが、彼女はまだ向こうを見ている。
ためしに耳をすませてみると…。

「何も聞こえないな……いや、妙にざわめいてるか？」

そう言うのもつかの間、遠くの草陰から2つの人影が現れた。

「誰だ。お前ら、なぜそこにいる!」

まさか、うそだろ。だって見回りは1時からのはずだ。

「なにをしている!看板も新聞も見なかったのか、ここいら一帯は
立ち入り禁止だ!」

軍人だ。不審なものを探してるんだ。フューイを見られるのは、か
なりヤバイ。

ぼくは深呼吸する。たぶんこう言えば、ただ立ち去れて言われる
だけのはず。

「すみませーん、なんにも知らないで山遊びに来ちゃいましたあ!
!」

「こつちへ来なさい!」

「え!？」

「身元を確認する!」

なんだって!?!見回りもだけど、ちょっとやりすぎじゃないか?ぼ

くらって、大人から

見たらほんのガキだろ？どういうことなんだろう。でも、それじゃまずい。

ぼくは彼女の手を引き、思わず逃げ出した。捕まるわけにはいかな
いよ。

滑るように走りながら顔が隠れるように、ジャケットのデカイフー
ドを被り、横の紐をきゅっと締める。視界は狭まるが、仕方ない。

「あ、待て！！」

ぼくらが逃げるもんだから、軍人は大声を出し追いかけ始める。

走りながら、ぼくはシドウさんの言葉を反芻した。なにか、聞き間
違いはなかったろうか。

ああ、さっきここ通った人言っていました。１時に軍、この小
山のこと、見回りするそうですよ。

さっき人に聞いた。１時から。

そうだ、そうに違いない。シドウさんはネイティブスピーカーじゃ
ないんだ。１時と１１時を聞き間違えたってちっとも不思議じゃな
い。

時計を見る。１１時２５分。軍人の先頭が山の裏に回ってくるには
充分な時間だ。下手したら追いつかれるぞ。

「急げ」

ぼくは声をかけ、彼女の手を離す。大丈夫、ちゃんとしてきてる。
ぼくは残り少ない体力をふり絞りながら、先を急ぐ。転がるように、
前へ。木々に手をかけ、時に蹴り、枝が足に刺さったのを気にする
暇もない。後ろを振り返る。軍人との距離が縮んだ。激しく息を吸
い、吐いて、もっと速く、もっと先へ。それでももどかしい、気持
ちに対し、脚の動きはあまりにも、おそい。

フューイを見る。彼女の息はまるで切れていない。

「おまえ、もっと先にいけ！！」

言っても彼女はあくまでもぼくに合わせようとする。畜生、ぼくが

もつと急ぐしかない。

ふと、めまいに襲われる。息を吸い込んでも苦しいままだ。足がもつれる。転んでたまるか。ぼくは木に身体を打ちつけ、なんとか転倒を免れる。けれど、ああ、距離がさらに縮んだ。さらに焦った。ぼくは、次の瞬間ほんとうに転んでしまった。

そのときだ、ぼくに駆け寄るため、すばやくしゃがんだフューイのフードがうしろに取れたのは。

「あ！」

声をあげたのは、ぼくと先に行く軍人。ほぼ同時だった。

「白い怪物……」

軍人2人はフューイのつむじを見て固まった。ぼくはフューイの髪をわし掴みそのまま彼女が顔を上げないようにとっさに固定する。

「白い不気味な……」

うわごとのような声。先に行く軍人はすぐそこまで来ていた。ぼくはフードの端から横目で相手を見る。目が離せない、間合いは充分に詰まっている。

次に走り出したらそのときには捕まってしまうだろう。万事休すか。ぼくは唾ををぐくりとのんだ。

しかし。

パン！！ パン！！

立て続けに二度。

「ぎゃあ！！」

「うあつ！！」

「ええっ」

音に続いて、軍人が相次いで奇声を発した。それにつられて、ぼくも思わず声を出してしまった。

ぼくは目の前の光景に目を疑った。いままさに、勝利を目前にしたはずの軍人たちが、うめきながらくずおれていく。そしてすみやかに、動かなくなった。

「な、なんなんだ、いつたい」

と、横で場違いなほど陽気でのんびりとした声が響く。

「うーん、我ながらカッコ良すぎる助っ人ぶりだねえ」

まさか、こいつは。

「さっきの占い師もどきじゃねえか」

「あはっ 神秘的でいいでしょ」

現れたのは、先ほど広場にいた青目の紙芝居師だ。手にはピストルのようなものを持っている。

「なんで、おまえ……」

あまりにおかしなことが多すぎて、言葉が先に進まない。何をどう聞くべきか、まるでわからない。

「まあ、そんなに警戒しないでよ。少なくとも、敵じゃないんだからさ。それよりも早くおいで。追っ手はこれだけじゃないでしょ？」

「あ、でも」

「そのこの2人は死んでないよ、さあはやく」

ぼくは戸惑いながらも立ち上がる。しかし、

「つつ」

見れば足から血が流れている。さっき小枝が突き刺さったところが、いまさらながら痛みだす。

「仕方ないなあ」

紙芝居師はぼくのそばに来て、助け起こしてくれた。

「このまま走るよ。君も付いておいで」

今度はフューイに言う。しかし彼女はすこし距離をとり、戸惑う素振りをみせる。

「フューイ」

ぼくがそういうと、やはりかなり躊躇するように、彼女はこくりとうなずいた。しかたないだろ、いくら胡散臭くても、今はこいつに頼るしかない。

「ねえ、しばらく息をとめられる？」

紙芝居師は脈絡もなく聞いた。

「はあ!？」

「まあ、ちよつと我慢してよ」

すると占い師はいったんぼくを木に寄りかからせ、袖から紐の付いた鈍色のピンポン玉のようなものを取り出すと、すりあわせて火を付けた。

「はい、息止めて」

そしてもと来たところに投げつけた。それが落ちたあたりから、煙が舞い上がる。

「あの煙、あまり吸わないようにね」

ぼくはフューイの鼻と口をおさえ、そのまま睨みつける。離すと息を吐いたので、再度同じ事したら、ぼくの言わんとしていることを理解したみたいだ。

「ちよつと急ぐよ」

紙芝居師はぼくを支えながら、歩調を速める。

そのあと何回かあの玉を投げながら、ぼくらは先を急いだ。

Chapter 4 迷走のち迷宮入り

「痛つ、う、いつてえ……」

足に刺さった小枝が引っこ抜かれる。

「はい。男の子、そんなにわめかない」

どつかのオバちゃんみたいに言つて、紙芝居師は手際よく手当てをする。それから包帯を巻き終えて、

「きつくない？」

と聞く。足に巻かれた包帯は、きつくもなければ緩くもない。

「大丈夫、丁度いい。あの、ありがとう」

ぼくはぎこちなく言う。

「どういたしまして」

紙芝居師は、綺麗な目元をほころばせた。

今ぼくらは小さな山小屋の中にいる。それは神殿の小山の、北西の山奥にある簡素なものだ。何もないから、ちよつと汚いんだけど、ぼくらは床に座っている。

「ほんと、逃げ切れてよかったねえ」

さつき投げた玉は催眠のためのもので、人体に害はないという。煙が広がってからしばらくは漂い続けるらしく、効果は持続するらしい。

「最初の2人には何をしたんですか」

「あれも睡眠薬だよ。軍人さんにピンが刺さってるのを見なかった？こつ、ピストルみたいのでパンつて」

すると紙芝居師は銃を撃つ仕草を試みせる。

「あの玉だと、煙の効果が広がるまで時間がかかるから撃つたんだ。そんなに吸わなくなつて、極端に効く人も中にはいるんだけどね」フューイがその極端に効く人（？）だったらしく、部屋の隅でぐっすりと眠っている。

「たぶんあの後、銃声じみた音に釣られた軍人さんたちが、あの煙にいつぱい引つかかったと思うよ」

そこまで計算済みだったのか。

「んでも早めに町に帰ったほうがいいね。顔は見られてない？」

「ええ、たぶん」

「なら、まあ大丈夫かな。足は平気？」

「はい、ちよつと休んだら歩けると思います。あいつ、起こさなくちゃな…。あの、あなたは…」

そう、この人は一体全体何者なんだろう。なんであんな場所にいたのかな。ていうか、後をつけられていたのかも知れないし。

「ちよつと待ってね…」

それから紙芝居師は被っていたフードをうしろにやる。

するとつややかな黒髪が現れた。後ろ髪がうなじのあたりまでの長さだ。ぼくとそう変わらない。

さつきはフードで隠れていた額飾りも姿を現す。血赤の石。澄んで

いるが、ルビーとは違い、ヒスイのように清楚なものだ。ワンピースのピアスにも同じ石が使われている。サファイアの瞳にあつらえたように映える。

次に目より下を隠していた布をはずす。

「あ……」

思わず声が漏れた。その姿のあまりの美しさに言葉を目を奪われるってやつ。まるで人間じゃないみたいだ。肌なんかフューイくらい白いくて、唇は赤みをおびてる。薄く化粧を施してるからか、妙に艶めいてる感じ。こうしてすべてを見ると、目元なんかよりいつそう魅力的でさ、見つめられると顔がほてる。

「あらあら、可愛いねえ。でも……」

紙芝居師はこちらに視線を絡ませながら、妖しく微笑む。

「そんなに見つめられたら、さすがの『俺』でも照れちゃうな」

紙芝居師は声音を低めて言った。

「は？」

ぼくは目を見開いて、ついでに口までおっぴろげたまま青ざめた。

「やだなあ、そんなに驚かないでよ」

声のトーンを元に戻し、紙芝居師はけらけら笑う。驚くなどとは言いが、ぼくの様子が面白くてたまらないといったふうだ。確信犯で意表をついたのはあきらか。

「なにそれ、なんだそれ。俺？てことは、あんた男ってこと？はあ？まじかよ、うそだろ、だいいち、その化粧はなんなんだ」

息も絶え絶えにぼくは抗議する。すると紙芝居師はさらに身体を折って笑いまくる。

「あは、苦し。いいねえ坊やは、反応が素直で………っあははははもうなんと言われてもショックは隠せなかった。

けれど考えてみれば、ぼくの全世界であるこの国周辺の風俗的には女性は長い髪にスカートなのが普通だ（ということはフューイの今の格好はひどく常識はずれ）。社会で習ったけど、もっと遠くの地域でも、だいたいそんなものって聞いたことがあったから、この人

の髪と服装から性別くらい判断すべきだったんだ。

といつてもこの紙芝居師の服装は、女性の風俗でないパンツ（ズボン）を指す）着用で女物の濃い紫のトンがり靴。たぶん女物の薄紫のコート。

だからやつぱりあながちぼくのミスジャッジとも言切れないような、なんというか、端的に言えばへんな格好なんだ。

なんと思えばいいんだろう。ぼくは眉をしかめてうなる。

まあ、見るように見れば妖しい美少年に見えなくもないけど、でも……うん。

「け、化粧は無いんじゃない……」

「あは、よく似合うでしょ」

なんかもう、なんともいえないよ。

ぼくは忘れていた疲労感を思いきり思い出してうなだれる。

「ところで坊や、もっと大事な質問があつたんじゃない？」

そうだ、変なところに気を取られて、肝心なことを聞き忘れてた。でもその前に。

「坊やとか言うなよ。オレとあんた、そう違いないだろ」

紙芝居師は見たところ15、6歳くらいだ。

「君いくつ？」

「14」

「……………へえ」

「なんだその間は」

「若見えも、しすぎると気の毒だねえ」

「ああ!？」

なんだよそれ、小さいからか？このオレがつ。

同情されると余計腹立つよ。童顔だって、大したことないと思ってたのに。

「まあ、それは置いといて」

「置いとけるか」

投げっぱなしにも程がある。なんかもう、ショック続きでやんなる

よ。

ため息をつくぼくを見ながら、紙芝居師は微笑んでいる。というか、これが定番なのか、ずっとこの表情だ。どこか掴みきれない、不可思議な微笑み。

得体の知れなさに余計に拍車がかかる。

「まあ落ち着いて」

そう言われて、ぼくは咄嗟に反抗しようとする。

けれど、目で制される。

黙れ、と。

青い瞳の奥の何かが語る。

それはほんとうに唐突なことだった。

空気が急に変わった。

どう変わったのかはわからない。けれど、あきらかに違う。

ぼくはその変化に付いていけず、目を泳がせた。

こんな空気は感じたことがない。

突然なんなんだ、からかっているのか。

探るように、相手を見つめてみる。

いや、戯れなんかじゃない。

本能が悟る。その危うさを。

先程までの紙芝居師とはまったく異質。まるで人が変わってしまったように印象が違う。

満足したように、紙芝居師はぼくをじっと見据えたまま、紅い口元に笑みをたたえる。

その笑みの鋭さ、そして冷たさに、ぼくは背筋を凍らせる。

「埒が明かないから本題に入るよ」

ぼくはうなずくこともできずに相手を見る。

それを肯定と取ったのか否か。

目の前の相手は、ぼくが抱いていた質問を、先読みながら続ける。

「『俺がなぜあの場所にいたか？』答えはね、俺は君たちを市場か

らずとつけていた」

「…ああ」

ぼくは噴き出した冷や汗をぬぐわずにうなずく。動作が、どうしてもぎこちなくなる。

「それはわかっていたようだね。『じゃあ目的は？』きみが何をおいても、俺の何が気になっても、知らなくちゃいけなかったこと。それも第一に、迅速に」

「なにが、言いたい」

ゆつくりと言う。ひどく、いやな予感だ。

なぜか、話が結論に及ぶのを先延ばしなくちゃいけない気がする。時間を稼ぐために。いや、そうしなきゃ、危ないんだって頭の奥から聞こえてくるようだ。

「別に君が愚かなわけじゃないんだよ。この国はほんとに平和なんだなって思ってたね。ピンチに見舞わたからって、俺が敵じゃないと言えばすぐに頼る。助けられて、どこか疑いながらも信用しはじめる。軽口につられる…」

「それが、どうした」

言いながら、ぼくははつきりと危機感を抱いていた。

沈黙に、心臓の音だけが耳に響く。

そして深い後悔にも襲われる。

どうして警戒を解いた。こいつの言うとおり、平和ボケしてるのはわかる。

けれど追われるなんていう非常事態に、なんでそうしてしまったのか。

なんで、どうして。

そうだ、どうしてピンとこなかったんだ。

こいつも、なんらかの理由で。

「フューイを、狙ってるんだな」

紙芝居師は上がっている口角を、さらに引き上げて、歯を見せる。肯定。

その笑みはそう告げる。

ならば、ぼくは。

邪魔な者だ。

「オレに顔を見せたのは……」

いままさに、始末してしまうから。

見れば、音もなく据えられた銃口。

金属音。

相手はリヴォルバーをもてあそぶように回し、収める。

「さよなら、坊や」

ぼくの目は見開き。身体はふるえることすら忘れる。

声すら出ない。

息は止まり、心臓だけが最後だといわんばかりに早鐘をうつ。

いつだ、銃の音がするのは。

いまか。

ぼくはきつく目を閉じる。

パン

刹那、視界が朱に染まった。

chapter 2 更新（後書き）

ここまでお読みいただき、誠にありがとうございます。これから『ぼくらの島』は邪道を突き進んでまいります。最後までお付き合いいただけたら、恐悦至極にございますm——（mでは、またの機会に（）> <）／

chapter 3 迷宮の入り口

ああ、暗いな。

でもすごく気持ちいい。

ここはどこなんだろう。天国かな。天国って思ったより暗いんだ。でもいいや。こんなに気持ちいいのなら。

『ティオン……』

おや、声がする。

『ティオン……』

そういえばオレ、そんな名前だったな。

『あ、君そんな名まえだったんだねえ』

なんだ？

『ティオン？』

なんかおかしくないか。

『ティオン、はやく起きなよお』

なに言ってるんだ？誰が寝てるって……っと思って試しにまぶたを開けてみる。と、

「う、うわ」

目の前に青い瞳。

ぼくは咄嗟に起き上がり、すわったまま壁まですっ飛んでいった。所要時間、およそ3秒。

「動き、早あい」

のんびり言うのは黒髪の紙芝居師だ。さっきぼくを殺したはずの。ぼくの身体が恐怖を覚えているらしく、呼吸が荒くなる。心臓はバ

クバクだ。

「ぷっ… あははははは」

「????」

訳がわからなくて混乱したまま、ぼくは呆然と笑い転げる紙芝居師を見ていた。

「くくっ…… ああ、ティオン！君ってほんとに最高っ」
じつと手をみる。

「なんで…… オレ、生きているのか」

すると紙芝居師は一瞬真顔でこちらを見る。それもつかの間、再びはじけるように笑い出した。腹をかかえて床に横たわり、目の端には涙まで浮かべて。

ぼくはというと、展開についていけずアホ面をしている。隣にはフューイが無表情で、（本人としてはおそらくかなり心配を表した表情だろうが）紙芝居師とぼくとを交互に見ている。

「おい」

ぼくはやっと気がしつかりしてきて、低い声で言った。

すると紙芝居師は起き上がり、『なあに』と答えた。

「どうということなんだよ、これは」

聞けば紙芝居師は笑いを収め、定型の微笑みに戻すと、床に置かれているピストルに手を伸ばす。

「あー!!」

ぼくは驚愕の声を出す。その銃口からは、色とりどりの紙製のリボンが飛び出している。よく見ると床には細かい紙くずが集められている。

「オリジナル・クラッカー弾 種も仕掛けもございますう」

紙芝居師は、マジシャンが種明かしするみたいにリボンをつまみ、ぼくに見せつける。

「人間の思い込みって面白いよね 死んだ気になって気絶しちゃうなんてさ」

「なっ」

なんだそりゃ

!!!!

ぼくの絶叫で、山小屋の周りの小鳥たちが飛び立った。

「な、おま、そ、なんのつもりだッッ」

声も枯れんばかりに叫ぶと、紙芝居師は最高に可愛い子ぶった笑顔をつくる。

「もちろん、ただのお遊び」

「ッ」

ぼくはもういちど、声にならない声で絶叫した。

もうなんと言っても遊ばれるだけのような気がする。それもかなり悪趣味な方法で。

それにしてもさっきの冷たい目。殺気ばんだあの空気。

それはまやかしかんかじゃない。ぼくにだって、それくらいはわかる。

いったい何が本気でなにが冗談なのか。

はつきりしたのは目の前のこいつが只者じゃないって事くらいだ。

「そんな深刻な顔しないでよ。冗談だって言ったでしょ。あくまで俺は君らの味方だよ」

「それは嘘だ」

ぼくは断言する。紙芝居師は「おや」と首をかしげる。流した目が、面白そうに先をうながす。

「さっきのおまえの言葉は、冗談なんかじゃない。おまえは味方なんかじゃない。それにおまえは、本当にオレを殺そうとしただろう。そのふざけた態度はやめろ。おまえの目的はなんだ」

紙芝居師はしなを作るように、軽くうでを組む。

「いい感じ、ちゃんと学習してるじゃない。ものには裏があるって事を…。でもね、これを見て」

紙芝居師はピストルのリヴォルバーを横にスライドさせる。そしてぼくに銃口の裏をみせる。ぼくは息をのんだ。

「ひとつが仕掛け入りの弾、このカラの部分に入ってたクラッカーのね。後は実弾。かなりの確率で君は死んでた。こんなふうに、裏はけっこう複雑」

「何のために」

「ちよつとした運試しだよ。君にはやっぱりなにかの加護があるんだね。うーん、やつぱり俺、君たちの様子を見守ることに決めた」話がまったく見えない。

「まだるっこしいから色々ぼんぼん話しちゃうけど、それはもう、そういうものとして理解してくれるかな。気の進まない質問には答えない。とりあえず歩きながら話そう」

chapter 4 ぼくの知らない世界

時刻は午後1時。ぼくは10分ほど気絶していたらしい。

ぼくらは市街地の北東側である第7区を目指し、街の北側の山から南下している。ぼくの住む4区からは歩いて1時間はかかる場所だ。追っ手がいるのでぼくは非常に複雑な気持ちながら、紙芝居師に従った。

こっちの山の中は、神殿の小山よりもずっと暗い。それでも細い山道がかるうじて残っていた。ぼくの足は固定されて落ちついているのか、そんなに痛まなくなっていた。ぼくらは3人で縦に一列になって、先を急いだ。

「マジで、わけわかんねえな」

紙芝居師はフューイを狙っていることをあつさりと認めた。でもぼくを、どうこうするつもりはないらしい。

「だから結局おまえはなんなんだ。敵なのか、味方なのか」

「どちらとも言えないよ」

ぼくは抗議するため口を開きかける。しかし。

「あえて言うなら、今は、味方だよ。フューイが誰かに取られるのはまずい。だからこうして君と逃げてる」

「じゃあ軍を撒いたら敵になるのか」

「そういう意味の、いま、じゃない」

たぶん、もうすこし長いスパンの、いま、か。いつまでが味方か、ぼくに見極められるだろうか。いや、こんな得体のしれない奴のこゝとだ、見極めなきゃ、命の危険があるかもしれない。仮に見極められても、ぼくが対処できるかは別だ。なんだよ、万事休すなのはちつとも変わってないじゃないか。なんとか策は練れないものか。とりあえず、こいつの話聞いていくしかない。情報収集から、なにか突破口を見出すしか……。でもどこへ向けて？ なにがいまの

ぼくらにとって最良の策になるんだろう。

ぼくはフューイをどうしたいんだろう。いや、どうすべきなんだろう。ただ、軍に捕らえられるのはマズい気はする。そうだ、まずは軍が……。

「……………軍は、なんでフューイを狙ってるんだろう」

先頭に行く紙芝居師の背中に向かって言う。

「別にフューイを限定して狙ってるわけじゃないんだろうね。だれかに聞かなかった？ 軍は不審なものを探してるって」

「じゃあ軍がいま探してるのは、不審なオレらか」

「そう。いまはね」

「でもあの時は逃げるしかなかったんだ。でもなんなんだ、あの異常なまでの警戒っぷりは。やつら、なにがしたいんだよ。ていうか、その不審なものってなんなんだ？」

「それはまだ、俺にもはつきりわかんないよ」

「なんだよ、全部知ってるみたいな顔して」

「あは」

「で、おまえはなんでフューイを……………」

「狙ってるか？ まあ、それに答えるのは時間がかかるから言わない。いまは面倒臭いし」

「ふざけるな」

憤るぼくに紙芝居師は何気なくこう言った。

「そもそも用があるのはフューイじゃなくてフューイの女神像だったんだけどな」

なんだと。

ぼくは立ち止まり、前に行く紙芝居師を睨みつけた。うしろのフューイがぼくの背中にぶつかる。紙芝居師も立ち止まり、こちらを振り返る。紙芝居師はフューイよりもすこし背丈があるから、ぼくはちよつと見上げるかたちになる。

「おまえ、どこまで知っている」

「俺の予想だと、たぶん君と同じくらい」

「答えになってない」

「君こそ、質問になってないよ。君は何を知ってるの？」

ぼくらは黙って対峙した。弱い風だけが、その間を通り過ぎる。紙芝居師が、また歩き出したから、ぼくらもまたそれにならう。

「こいつはやっぱりあの女神像なのか」

「そうだよ」

「オレは、なんとなくそうなんじゃないかって思い始めたただけだ」

「そう。それだけ？」

「ああ」

「じゃあ、俺とそんなに変わらないね。ただ俺は、その女神像がそのフューイになる瞬間を見たんだけど」

「????」

「どういう原理かはまったくわからないよ。ただ3日前の夜明け前、女神像を持ち出そうとしたら……」

話によるとそのときに音もなくまばゆい光が溢れ、その光で紙芝居師はしばらくの間 気絶したそう。気がついたら人の姿のフューイがいて、石を食っていたらしい。

それで、昨日の夕方まであの山小屋に捉えていたということだ。そのあとフューイが逃げ出してぼくに見つかったんだから、こいつは島民に目撃されてないんじゃないのかな。

「……で、そのときに誰かが見ていたのに気がついて、俺はフューイを連れて逃げたんだ」

「噂から言つとその誰かって神官だろ。そうだった？」

「たぶんね」

「神官が見たつていう白と黒の不気味な何かって、おまえらのことだったのか」

「俺は全身黒ずくめだったし、フューイのほら、その髪」

紙芝居師は振り向いてフューイの方を向く。

「それで噂の印象から思うに、未知の何かが怪しいからって軍が動いてるみたいだけど……」

そのことだったら如何にか策が練れそうだ。先を続けようとしたら紙芝居師が制した。

「もしかしてそれを突き止めるか、神官がそういうものだと思間違えたようなものを捏造して軍に差し出せば、逃避の必要がなくなっ
ていいとか考えてない？」

「なに？　だめなのか？」

結構いい手だと、おもったのに。というか、こいつにはぼくの考えなんかお見通しなのか。なんか無性にくやしいよ。

「でもそんなのおかしいでしょ？　オカルトが支配する国でもないんだし。それ相応に地に足のついた理由があるはずでしょ。以前からなにかあるはずだよ。彼らが納得するような、何かが。でも彼らはその何かの正体をはつきりとは知らない……いや、知っているのかもね。神官の証言は何かのきっかけの全てじゃなくて、幕開きの最後の一押しだった。……なるほどねえ、わかってきた」

「なにが？」

「教えなあい。言ったでしょ、気の進まない質問には答えないって。それに、ティオンが知っても結局どうしようもないことだよ。話も横道に反れてめんどくさいし」

ぼくは舌打ちをした。こう言うからに、何をどうしてもはぐらかされるんだろ。こいつが勝手に、今のぼくにとって必要ないと判断した事柄は絶対に話さない。

ほんのちよつと握めてきた。こいつはこうして気になるように話をかすめて、それで相手の反応を面白がるような、胸クソ悪いタイプの奴だ。

だったら、意地でも聞き返すもんか。

そんなぼくの様子をみて、紙芝居師はくすつと笑った。

ああもう、どうしたってむかつくヤローだ。

「なあ、でもおまえフューイに逃げられたんだよな。そういうこと
間抜けなんじゃん」

これでどうだ。言い返したぞ。

紙芝居師はゆっくり振り向く。一瞬だけ、ぼくは怯んだ。でも、言
っちゃったもんは仕方ない。

「そうそれ、それなんだよ！」

意外な反応に、ぼくはべつの意味で怯んだ。

「この子俺の言う事は、何をどうしたって聞かないんだよ。一切従
おうとしないの」

「そりやおまえがひどいことでもしたんだろ？　で、おまえはあい
つの事どうやって捕まえてたんだよ」

「ああ、それは俺が光を見て気絶したあと……」

「そこまで話、もどるのか」

「まあ聞いてよ」

これも話によると、紙芝居師が気づいた後、瓦礫の中でフューイの
食事風景を見たらしい。ライが言ってた歯形はこのとき付いたんだ。
神殿はフューイの光にやられたんだろうな。いったいこいつは、ど
れだけの力を秘めた生き物なんだろう。怖すぎる。

「で、こんな小っさい女神像が人の姿に変わって、石まで食ってる
ところ見てどう思ったんだ」

女神像の身長（大きいりんご縦に3・4個分の大きさ）を手で示し
ながらぼくは言った。

そしたら紙芝居師はあっさりこう答えた。

「こういうことも、あるのかなって」

（本人いわく、とつても建設的な考えから）狙ってた女神像が姿を
変えたならそれを捕まえればいいと思っただけらしい。

その方法だけど、宝石を餌にフューイを釣ったみたいなんだ。その

間抜けそうな様子に、ぼくは思いつきりうなだれた。このフューイなら、ありえるなつて。彼女のほうを見ながら思う。

「おまえ、食い意地張ってるもんな」

それにさつき市場で翡翠に釘付けだった。

それで釣り続けていたことに業を煮やし、逃げ出したつて話だ。

「待てよ。なんでフューイが宝石に釣られるつてわかったんだ」

「それはね。むかし古文書学に詳しい知人に『石を食らう神さま』の話を読んだことがあつて。あ、もしかしてこれかなつて思ったから、確かめてみたんだ」

「……………そこでそういう発想に飛ぶのが……………いや、なんでもないよ」

こいつの価値観というか常識はぼくとはまるでちがう。でもそのおかげか、紙芝居師の見解はものすごく的を射ている。だいいち、大切なことがわかった。その古文書の中にフューイの秘密が隠されてるつてことだ。

「古文書には他になんて？」

「よく覚えてない。昔ちらつと話されたただだし」

「書名は」

「だから、しらなーい」

役立たねーな。

「それで話戻すけど、なんでフューイはティオンの言うことをきくの？」

紙芝居師は小首をかしげてみせる。

「いや、わりと好き勝手されてるぞ」

紙芝居師は、ぼくの目をじつと覗き込む。眉をしかめて、怪訝そうな顔をする。口元が笑んだのままなのがおかしい。

「でもわりと従つてるように見えるけど？ 襲いかかられたりしてないでしょ」

そんな質問をしてくるといふことは。

「お前、襲撃でもされたのか？」

ぼくが言つと、紙芝居師はこくりと頷く。

「いま、膝のあたりにヒビが入ってるの。飛びかかれて、怪我しちゃった」

「そうか……」

どうやらここ2日間の2人の共同生活には凄まじいものがあつたらしい。いわく、その苦労話で（そんなもん読みたくないけど）本が1冊書けるくらいには。というか、このフューイって奴は、やっぱり凶暴な怪物なんだ。光で神殿を壊したとかいう話より生々しく思えて、ぼくは昨日そばで寝たことを思い出すと今更ながら身震いした。

「なにをどうしたら、そうなるんだ」

「フューイをつれて島を出ようとしたら、こんな目に遭つたの。この子が船を見た途端の悲劇でさ」

にこりと、足を指差す。

「そんなんではけるもんなのか」

ぼくが言つと。

「しつかり固定してるし、大丈夫だよ」

でも紙芝居師の盛っているケース型のかばんはかなり重そうだ。しかもさつきはオレの事も支えて山道を歩いていた。しかしこいつは涼しい顔でピンピンしている。きつと、身体の構造からしてこいつはなにか普通じゃないのかもしれない。

あと、聞き捨てなら無いことが。紙芝居師は島を出ようとしたと言つた。用があるのはフューイの像だとも。だとしたら紙芝居師の正体は、盗賊のようなものののか。

それならこいつの目的は、フューイを元の像に戻すことなのだろうか。

というより、考えるべきはまず奴が島を出ようとして失敗したという点だ。現時点で島にいるんだから、フューイを連れてここから出て行くことが紙芝居師の狙い。でもあれ、待てよ。

「フューイに睡眠薬でも使えば、島から出るのなんか簡単だったん

じゃないのか？」

「薬が効くなんて、さっきわかったことだもん」

なるほど。それにいざ連れ出したとして、フューイが人間の姿のままだったら暴れて大変だろうってことか。それなら当面、打開策は模索中ということだろう。

「また話戻すけど、俺が思うにティオンってフューイの主なんじゃないかな」

「なんでまた」

ぼくは首をひねる。そして舌打ちした。

話が戻ったというよりも、すっ飛んだという印象だ。

こいつの語り口は聞いていて腹が立つ。ハナから話題をぼんと投げかけて、あとから付け足していくような。

「その古文書の話ではたしか、その神様は誰かに使役されてたような気がする。思い当たる節はない？」

思い当たる節と言われても、急には思い浮かばない。

ぼくは考える。

そういえば、こいつはぼくの名前をはじめから知っていたような。

子供のころからだって像の前で名乗りをした覚えはないのに（そんな変なガキじゃなかったはず）。しかも現れたのがぼくだって分かったら逃げ出すのをやめた。紙芝居師の話を聞けば、ぼくに従ってると思えなくてもいいし……。

「紙芝居師に対してだけ反抗的だったってことは？」

「思えないね。そんな下手なやり方はしないもの。この俺が扱えないなら誰でも無理だよ」

すごい自信だけど、あながち過信とも思えなかった。相手をたらしこむの、うまいよこいつ。実際こいつが悪ふざけで、ぼくのこと擬似殺人して見せなければ、ぼくはこいつのこと、もつと信用していたろうし。なんでまたあんな遊びなんか……。

ちがう、思考がそれた。ともかくどういうわけか、フューイがぼくのことを主人って定めたっていう考えは、事の流れから言えば辻褄

が合わないとは言切れないようだ。

「たぶんそれは、運命として決まってる事なんだよ」

「運命？」

「そう。つまり、君は女神使いになるべく生まれた」

「はあ！？」

突拍子もない話に、目の前が眩むようだ。

「否定するの？　じゃあなんであの時、あのタイミングで君たちは出会った？　君は銃で撃ち抜かれなかった？　君は知らないかも知れないけど、ティオンが寝てる間もう一度リヴォルバーのルーレットしてみたんだよ。結果は36分の1のスカ」

そんなことを。ぼくは死線を二度も越えてたのか。というか、それが運命の証明になるのか？

「こつという目に見える形で、命が運に左右されるものに君は極端に強い」

状況をまるで飲み込めないぼくをよそに、紙芝居師はそう言っですと銃を取り出し　こちらに向ける。

「な、ちょ、おまつ」

「大丈夫」

するとリヴォルバーをはじいて高速でまわし、すみやかに収める。

カチッ

え、カチッ？　ぼくはきつく閉じた目をあけて、とつさに顔の前にやった腕を、下ろす。

「ほらね」

「ほらねじゃねえよッ」

「でも何度やっても大丈夫だよ、ほら」

「……って、言ってるそばからまた撃つなッ」

カチッ

「1296分の1」

紙芝居師はいつそ殺してやりたいほどに可愛らしく微笑んだ。両手をかるくあげて、心底楽しそうなスマイルでポーズ。

「万が一^{いち}当たったらどーするー!」

「大丈夫だって。面白いからもっとやろうよ。なんなら新記録目指して」

「誰がやるかッ」

「うーん『加護的にはもう付き合ってもらえないしい』とか思われなくてもマズいし、そろそろやめとこっか?」

そう言つて、人差し指をあごの先に当て、困ったようにぼくを見やる。

「あたりまえだッツ!!!」

叫んで、頭がくらくらした。最大級のめまいだ。エクトプラズムを出しながら倒れかけるぼくを、うしろの女神が支えた。

「ありがとうよ……」

もう壊れた笑い泣きをしそうだ。力が入らない。

「さすが役目を果たすための相棒だね。仲いいねえ」

「あ? なにそれ……」

「だってなにかが起こり得るから、いまフューイがそんな姿になつたんでしょ?」

「あ」

そうか。

考えてみればその通りだ。なにもないなら、こんな事つてない。これは、なにかの前触れなのかもしれない。むしろそう考えるほうが妥当だ。

「だから、おまえはオレとセットでフューイを見張ろうつて魂胆なのか」

「そう」

くやしいけど。

「オレは、オレだけの力じゃフューイのこと、どうすることもできない、だから……」

「己の器量を知ってるのはいいことだね。そう、一緒に謎解きするしか選択肢はないよね」

「オレは……」

なんだろう、突然胸のどこかに何かが引っかかり始めた。

それはフューイと出会ってから、深い部分に沈んでいながら、けれど確実にあつた何かが急に浮かんできたっていう、そんな感じ。上手く整理できないのが歯がゆい。……違う、認めたくないだけだ。

こんなことを思っているなんて。

なんでオレばかりがこんな目に遭うんだ、なんて。

紙芝居師はぼくを見て、この目を覗く。人の胸の内を見透かすような、澄んだ青い瞳が射抜くように見つめる。目を離れたところで、どうせぼくの胸のうちなどお見通しだろう。

紙芝居師は口端の片方をついと上げて、意地の悪そうな笑みをつくる。

そうして、まるで幼子をあやすような、やさしい声色で告げる。

「君に芽生えた心のもやを、言葉にしてあげる。これは『強制的に課せられた使命、責任、運命』理不尽だよ。君がもしこれから逃げて、何も対処せず、何か大変な事態が起こったらそれはすなわち君の罪」

「ああ」

「突然のことにどんなに戸惑っても、時間は進む」

そうだ、これは避けられないんだ。自分を哀れんでいるなんて、そんな意味の無いことしている事態でもない。そうならば、道はひとつしかないじゃないか。

ぼくは紙芝居師の視線に応え、挑戦的に相手を見る。決意は固まった。

「オレは、探していくしかない」

紙芝居師は目を細める。

「そう、自分がすべきことを。謎を解きながら。すべてが片付いて、君と彼女の縁が切れるようなら彼女にこう命じて、この俺を主にと。それが前提なら、俺は君の手助けをしてあげる。君と彼女がすべきことを、一緒に探してあげる。俺の目的は果たせるかどうかかわからないけど」

ぼくは答えない。ふたつ返事で答えてしまうのは、ひどく愚かな気がしてしまう。信用できない相手の申し出には、どうしても慎重になる。相手の言っていることに穴は無いだろうか。半ば誘導じみた話の流れに戸惑う。絶対条件として、こいつがフューイを狙う目的がわからなくちゃ対処のしようも無い。けれどそれを聞いても、さつきと同様『話すのがめんどろ』で一蹴されてしまうだろう。

「どうかな、そんなに悪い条件ではないんじゃない？　しばらくは日常に俺とフューイが加わるだけ……」

だまっているぼくに、紙芝居師は重ねて言った。どうにせよ、これに同意してみせるしか今は手立てが無い。

ぼくはうなずいた。すると紙芝居師は一見無害な笑みを浮かべる。

「これから、しばらく宜しくね」

（できるかどうかはわからないけど）こいつにフューイが渡ったあと、どうなるかはわからない。けれどこいつは、いま、は全面的に味方。確かに裏は結構複雑。

おもしろいじゃないか。ぼくだってそれまでには策を練るよ。おまえの筋書き通りにはいかせない。利用するだけ利用してやるよ。

相手は上手。相当荷が重いけど、いや、めっちゃめっちゃ重いけど、やるっきゃないね。

c h a p t e r 4 ぼくの知らない世界（後書き）

お目通しいただき誠に有難う御座います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2799a/>

ぼくらの島 ~ a fabulous island ~

2010年10月21日20時09分発行